

えんがわ

第102号

2015年11月発行

発行元
衣笠病院グループ
横須賀市小矢部
2-23-1
Tel 046-852-1182

その人らしさ

看護師という職業に就かせていただいで二十二年になります。多くの患者さんと出会わせて頂いた中で心に残っている患者さんのお話をさせて頂きます。

末期のがんで入院していた八〇歳代女性。足のむくみと体のだるさからベッド上での生活になっていました。ある朝、患者さんのもとへ訪室すると、ベッドに座り床頭台に向かって鏡を見ながらファンデーションをはたいているその人を見ました。ご高齢ですので肌も乾燥しており、化粧水とか乳液とか先に何か塗った方がファンデはのりまますよ、とかいらぬツツコミを

心の中でしながら。ですが、その姿がとても微笑ましく心に残っています。そしてその姿は、毎朝恒例であることを知りました。決して

体調が良いわけではなく、誰か特別な人の面会があるわけでもない。それでも朝は身だしなみを整えて化粧をする。それがこの人らしさなのだ、素敵だなと感じました。

そんなその人らしさを大切にできるような看護師でありたいと思います。



そして自分の身近にいる家族、職場の人のその人らしさも尊重できる人でありたいと感じています。

衣笠病院 本館五階病棟
看護主任 齊心 絵理

えんがわ在宅 ひとくちメモ

奈葉さんのお別れ

衣笠ホームでは年間約二〇名の方が亡くなられています。在宅や他施設から入居される方は九〇歳台の方が多く、在所日数も2年未満の方が増えており、入居されてすぐにお別れすることも珍しくありません。

人間本来の亡くなり方とはどの様にお考えになりますか？衣笠ホームではその方が生命の力を全て使い果たし、木が枯れる様に最期の時を穏やかにご家族と一緒を迎えていただくことを目標としています。世田谷区の特別養護老人ホーム芦花ホームの石飛幸三医師は「人生の最期は水分や栄養は入れない方がむしろ穏や

かに過ごせる。そうした命の閉じ方を『平穏死』と名付けました」と述べています。

家族が死を迎えるということを受け止めるのは辛く、苦しいことだと思えます。ただ何が本当に親のためなのかを一緒に相談させて頂いています。気持ちは何度も変わっていきます。本当にこれで良いのか？その都度何度でも医師、看護師、介護、ケアマネジャー、栄養士と話し合いをさせて頂き、より穏やかな最期を迎えていただけるようお手伝いさせていただきます。

衣笠ホーム
看護部主任 藤田美穂子



秋の夕日に照る山もみじ♪濃いも薄いも数ある中に♪もし自分を紅葉にたとえらば、私は色の薄い紅葉でしょう。薄情者ですから★